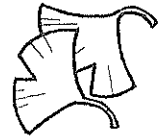


同和教育を全市民のものに——をスローガンに、今年も第十七回南園市同和教育研究会が十月十二日、市民体育館を主会場に約六百五十人が参加し開かれました。午前の全体会では、佐賀中学校の竹田均教頭が「同和教育で求められているものは」と題して講演、午後からは十三の分科会に分かれ、それぞれの教育の場での問題点を熱心に話し合いました。

今回は、全体会の講演について紹介します。

## 同和教育で今

# 求められているものは



佐賀中学校教頭 竹内均先生

今日は、私が同和教育にかかわってきた二十一年間の歩みを振り返って、話をしていきたいと思っております。

二十一年前、大方町の中学校へ移って来たとき、出合った部落の子供たちは、一年生から三年生までが一つのグループになり、昼休みにはみんな家で帰り、五時間めはいつも遅刻という状態でした。差別の固まりであった私は「こんな子供たちだから、差別をされても仕方ない」と、考えたものでした。

そんなことを思いながら一年が過ぎ、この子供たちとは逃げ隠れできないんだと思った私は、あ

の姿の中に、我々教師に訴えるものが何かあるのではないかとこの気持ちを持つようになりました。

二年目の卒業式の後、「君たちの姿は本心からではなく、何かを訴えているのではないか」と問いかけてみると、子供たちは「差別と闘っている。毎日の生活の中で、ああしなければ闘えない」ということでした。

毎日差別を受けているとは、具体的にどういうことか。いっしょにいなければ、周りの人に聞くに耐えない差別を受けるということとです。

あの子供たちの姿の中に、教師に吹きつけているその課題に答え

てゆくことが、我々が歩むべき同和教育であろうと考えたのが、二十一年前の出発でした。

それに比べ今は、本当に差別は見えにくくなったと思います。そのため、「もう差別はなくなった」という声を聞きますが、決して差別はなくなっていない。二十一年前の姿では見えませんが、差別の中味はまったく変わりなく生き続けています。

自分たちが進めている同和教育が、子供たちの生活の中に深く切り込んでいかなかったのではないのでしょうか。単なる知識としてだけ教えていけないか、反省する部分も多くなるように思います。

大切なことは「人間としての生き方を教えていく」ことです。それには、教師自身の生き方が変わることから出発しなければなりません。

私はよく若い先生に「己をさらせ」と言いますが、教師自身が現実の部落差別にどうかかわっているかを徹しく問い詰め、その姿を子供たちに反映して、部落問題を授業として組み立てていくことが重要で

今日、教師、行政の場合にも特に求められているものは、生活の中に溶け込んで、その中から部落差別の問題を考え、掘り起こしていく姿勢、努力だと考えます。

いじめの問題を集団の中で取り上げるとき、いじめられる子もいじめめる子も、その問題を通して共に成長するという方法でなければなりません。いじめられる子に、どんなに注意しても、いじめられる子が成長していかなければ、いじめはやまりません。

これから考えてみると、差別の現実から深く学ぶということは、日常の生活の深いところに目を向け、その中から差別を見抜いていくことです。しかし、それを集団の問題としていくことが行わなければ、一方でどんなに部落問題の授業をしても、本物の子供に変えていくことはできません。

現在、教育現場では、年間のスケジュールを立て、同和教育をする体制は整えられています。中味はどうなのか。本当に一人一人が、子供の前で己をさらす教育がなされているのか。ただ、知識を広めるだけの教育、つまり他人事としか授業がされていないところが、一つの大きな問題です。

大切なことは、部落問題と自分を、きちっと重ね合わせてゆきながら、その中で自分ほどの立場にいるかを、常に子供の前でさらしていく勇氣を持った授業をするということです。

私が、いろいろな地域に出向き、話す中で、「もうわかった」という声が返ってきます。しかし、道理がわかっただけで、それは最初からわかっていることです。

私の体験から言えば「差別とは思い込み」だと思います。私たちの身の回りには、思い込みが数限りなくあります。それを改めていくには、理解ではなく、具体的な生活を通して、誤りに気づいていくことが、何よりも大切ではないでしょうか。

